

## 《第 55 号》「羽村市消費生活センター開設 40 周年に寄せて」

中村 洋子(羽村市消費生活センター運営委員会 会長)

40 年前の昭和 50 年、立川から青梅線で 20 分、多摩川と草花丘陵を西に抱いた 3km 四方の小さな町「西多摩郡羽村町」に消費生活センターが誕生しました。

今回、開設 40 周年記念誌の編纂をする中で明らかになった、開設にいたるまでの羽村の主婦たちの「食」への取り組みをご紹介します。

昭和 30 年代、羽村町では、まず「学ぶ」こと、学んだことを「実践する」、疑問はとことん「追及する」、これらを柱に据えて、さまざまな「婦人学級」が動き始めました。

新しい情報を、次々とこの町にもたらしたのが、東京都地域婦人団体連盟の副会長だった故並木良子さんでした。疑問を持つとに慣れていなかった婦人たちも、食品添加物の危険性を学ぶ中、発がん性が疑われる AF2 が、毎日の食卓に頻繁に並ぶ「豆腐」に入っていると知り、「本当に大丈夫?」と心配になりました。当時、地域に開かれていた立川短大の先生方のご協力も得て、町にあるすべての豆腐屋さんに集まってもらい、一緒に AF2 について学びました。

そして生まれたのが合成殺菌料 AF2 を抜いた「羽村の安全豆腐」です。1 軒の篤志家をお願いして作ってもらうのは、比較的簡単なことかもしれませんが、町ぐるみでの取り組みができた点は、特筆すべきものだと思います。しかも、合成殺菌料 AF2 に発がん性が認められ、全面使用禁止になるのは、それから 4 年もあとでした。

国が許可している添加物を「使わずに」製造すると決めた 5 件の業者。それを支えるために、「ご存知でしょうか」という印刷物を全町に配布して理解を求め、積極的に「買い支える手」を増やす努力を惜しまなかった当時の主婦たち。この形が羽村の運動の原点になったのです。

その後の「無添加ハム・ソーセージ」誕生も全国初。地元の製造業者の後を押し、製造をお願いして実現させました。そうして作ってもらった製品を買い支えるために、「安全食品等を求める会」という共同購入の会を立ち上げ、会員を募り、定期購入を続けて現在に至っています。

こうした実績が、行政からの信頼にもなって、町立では全国 5 番目の羽村町消費生活センター設立につながったのだと確信しています。しかも、設立当時から今に至るまで、「必要な予算を用意し、運営は住民に任せる」という羽村行政独自の形を貫き続けてこられたのだと思います。

以上